大阪大学欧州センター長に赴任して思うこと

海外交流

長　谷　俊　治*

A Personal View from a New Regional Director of European Center of Academic Initiatives, Osaka University

Key Words：Groningen Office of Osaka University, Globalization, International Collaboration, University of Groningen

1．はじめに

グローバル化が急速に進む産業社会や知識社会の中では、日本の大学は優れた外国の大学との交流を通じて新しい知識や先端的研究を導入するだけではなく、世界の国々や地域の特色ある文化や歴史を背景に活動しているいろいろな大学との交流を通じて、既存の価値観にとらわれない教育研究活動を展開する独自性も求められている。大阪大学は、このようなグローバルなネットワークをつくりあげる努力を積み重ね、2016年6月現在、大学間の学術交流協定は109本、部局間のそれは535本に達するような多数の交流協定を結んでいる。2004年には北米センター（サンフランシスコオフィス）が、2005年には欧州センター（グローニンゲンオフィス）が、2006年にはASEANセンター（バンコクオフィス）が、そして2010年には東アジアセンター（上海オフィス）が開設され、これらのネットワーク活動のサポートの役割を担うとともに、海外展開のさらなる発展を目指して活動している。筆者は24年間に渡りお世話になった大阪大学蛋白質研究所を2016年3月に定年退職し、4月から欧州センター長の職に就いている。本稿の読者諸氏には、この職での活動はまだまだ初心者であることをご承知いただいた上で、大阪大学が欧州で通用するために当センターが果たすべきあるいは果たすことができる役割について、私見を述べることをお許しいただきたい。

* Toshiharu HASE
大阪大学大学院理学研究科生理学専攻博士後期課程中退
現在、大阪大学欧州センター長
名誉教授　特任教授　理学博士
TEL：+31 (0)50 363 4828
E-mail：director.hase@osaka-u-groningen.org

2．Why Groningen?

グローニンゲンはアムステルダムから北東部へ200 kmの距離に位置する人口20万人程度のオランダ第6番目の小都市で、欧州センターはそこのグローニンゲン大学内に設置されている。経済規模では大国とは言い難いオランダの地方都市である“グローニンゲンになぜ大阪大学が拠点を持っているのか”、私が欧州各地でこれまでお会いしたほとんどの人から口を揃えて受ける質問である。答える機会がこれまで何度もあった訳だが、今なお歯切れのよい説明をするのは簡単ではない。質問者は、日本の大学が欧州でその存在をアッピールするためにはもっと名の知れた大きな都市や大学に拠点を設置する方がより有効であると考えて、このような問いかけを発しているのであろうか。

グローニンゲン大学のホームページのトップページにも同じことを自問し、以下のように自答している。1）大学教育は世界トップレベルである、2）パイオニアとしての独自の研究力を備えている、そして、3）活力がみなぎる学生町である、と誇りをもって表明している。1）と2）の根拠資料として、今流行りの大学ランキングが挙げられている。Times Higher Education Rankingでは74位、Academic Ranking of World Universitiesでは75位、QS World University Rankingでは100位と、いずれも十分に高い順位にあり、世界トップ100位内である。大阪大学の教育研究力のレベルと同じか、もしかするとより優れているのかもしれない。なぜ、このようなランキング順位が付されるのか、その理由の一端を示す具体的データは後ほど述べさせていただく。

3）については、グローニンゲンを訪れた人であればおそらく誰もが共通して実感することであろう。

旧市街は100年以上も前の古い建物や石畳みの道路が現在も活用されていて、町並みは中世の雰囲気が溢れている。人口の4分の1以上が学生で、その内40％近くが留学生で、アジアやアフリカ諸国からの学生も多いらしい。写真（図1）にあるように、学生諸君がオランダの典型的な交通手段である自転車でこの歴史的旧市街を走り回り、いたるところでお茶や食事をしながら会話を楽しんでいる光景をみると、他の有名な大学町に勝るとも劣らない地球規模の活力に満ちていることが感じられる。是非、大阪大学の皆様にはグローニンゲンを訪れてその雰囲気に浸ってもらいたい。

図1　学生の自転車であふれるグローニンゲン大学付近の広場

私は「Why　Groningen?」に対する答えとして、既存の大学評価の価値観にはとらわれずに、大阪という古い商都の活力を基盤に、オランダの医学や化学の影響を強く受けて創基したのが大阪大学の歴史的な特色であり、それを手助けしてくれたグローニンゲン大学との関係を重視して、そこに価値を見出すことにより両大学にメリットのある新たな関係の発展が生まれるに違いないと説明するようにしている。オランダのみならず欧州の大学人の多くはグローニンゲン大学の特色には一目を置いているので、大阪大学のこのパートナーシップの立ち位置には好感を持って理解してもらえ、ひいては大阪大学の信用や欧州の各大学との今後の繋がりが発展して行くのではないかと自負するこの頃である。

3．外国の大学との共同研究のアウトカムの評価の一例

大阪大学の構成員は、国内外の大学をはじめとする外部の研究機関と共同研究活動を実施し、多くの共著論文を発表している。これらの共著論文の数と引用度に関するデータをもとに、共同研究の成果の量と質を評価できよう。この情報は大手学術雑誌の出版社が提供しているSciValと呼ばれるデータベース（学術情報データベースとして学内の構成員はアクセスできる）から取り出すことができる。図2はそのデータをまとめたものであり、上部パネルに大阪大学のものを示しているので、すこし詳しく説明する。

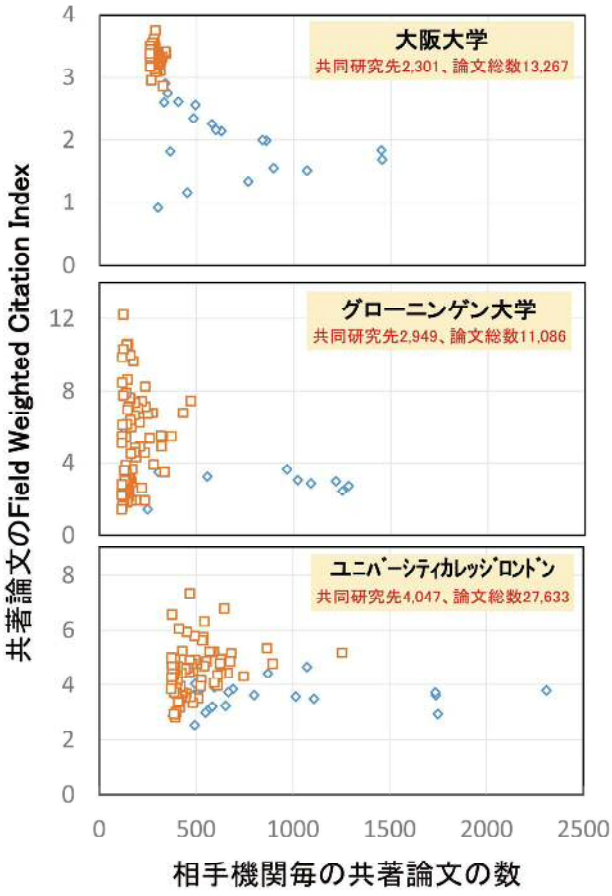

図2　大阪大学、グローニンゲン大学、ユニバーシティカレッジロンドンの共同研究先毎の2013年ー2015年に発表された共著論文の数とFWCI（平均値）の関係
　共著論文数の多いトップ100共同研究機関のデータをグラフ化している。青色◇は国内の、橙色□は国外の研究機関を示す。

2013年から2015年の間に、大阪大学は2,301の外部研究機関と共同研究を行い、13,267に上る共著論文を発表している。これらの共同研究機関先を共

著論文数でソートし、トップ100の研究機関のデータを選び出してグラフ化している。論文毎の引用数の多少の評価は、研究分野の引用動向に大きく左右されるので、この特徴を考慮して（すなわち引用が多くなされる分野から逆に少ない分野にまたがっているので）、平均的な引用回数の論文であればインデックス値が1となるように分野規格化した数値（Field Weighted Citation Index）を縦軸に取っている。大阪大学のグラフを見ると、2つの共同研究機関との共著論文数は1,500弱と突出して多いが、これらは京都大学と東京大を共同研究先とするものである。ただし、そのインデックス値は1.8程度と全体のインデックス値の分布の中では中間的レベルである。このような見方でグラフ全体をみると、橙の□印で示した国外の共同研究先として80か所上げられ、共著論文数は300程度にとどまっているが、インデックス値はすべて3から4に高留まりで集密している。青の◇印で示した国内と比べれば、海外共同研究は、量は少ないが質の高い成果が出ていることが一目瞭然で理解できよう。海外との共同研究が推奨される理由の一つがここにあるのであろう。

同じ分析をグローニンゲン大学で行った結果を中パネルに示している。オランダ国内の大学数は少ないので、海外機関との共同研究が中心になっているが、それらのインデックス値は1から12まで広範囲にまたがり、大阪大学とのそれとは大きく異なる。また、研究規模がより大きいロンドン大学のデータを見ても、海外研究機関との共同研究の成果の多様性は見て取れる。

この興味深い相違が出てくる理由は今後の詳しい解析を待つとしても、一般的な概要としては、以下のことが言えるのではなかろうか。即ち、大阪大学で国際共同研究を行う場合は、引用数が高くなるテーマ設定や相手先を選別するような限定要因が働いており、他の2大学はそのような事情はあまり考慮せずに必要に応じて共同研究がなされているのではなかろうか。この2大学の研究活動のグローバル化は大阪大学に比べて優れているものと推察することには異論はないと思う。このような状況を見ると、私見ではあるが、長い目でみた研究のグローバル化は、引用数の高くなる研究成果を追い求める“計算高い”共同研究（もちろん大事ではあるが）だけではなく、それとは別の意識のもとに、例えば“おおらかな”共同研究も手掛けることが、グローバル化の裾野を広げるには重要ではなかろうかと思っている。このような国際共同研究のスキームをもっと活発化してもらいたい。グローニンゲン大学のランキングが高いのはこのようなグローバル化が大学構成員の自由な発想で行われているためではなかろうか。

4．留学生に対する講義内容の一例

最後に、留学生にきめの細かい講義が行われている一例を紹介したい。大阪大学の文系学部の2年次から3年次にかけて交換留学生としてグローニンゲン大学に籍を置いていた学生からの情報である。実践的な英語教育の科目として、「Media and journalism culture: Writing for a wider audience」と題する講義を受講し、受講人数は全体で40人くらいであった。その学生は、メディア記事の原稿作成がレポート課題となった際に、グローニンゲン大学が中国の煙台に2017年に新キャンパスを開設するニュースを題材に取り上げてレポートを作成して提出した。教員と学生との間で2度の原稿改訂のやり取りが行われ、その最終稿に至る改訂プロセス（抜粋）を図3に示した。私には初稿の英文も十分なレベルだと見受けるが、教員側からのコメントを十分に反映して完成した最終稿は大変こなれて優れたものとなっている。因みにこの学生の評価は10から1のスケーリングで7であったとのことで、これは日本の大学での評価の良の上位に対応するらしい。このような講義をすれば留学生に対しての教育効果が上がることは間違いない。私は大阪大学理学部の授業を長年担当してきたが、レポートの添削を多人数の受講生に対してこれほど細かくした記憶はない。研究やその他のことに自分の時間的エフォートを配分してきたためであるが、今さら悔やんでも後の祭りである。

5．おわりに

欧州センターに来てからグローバル化について以上述べたようなことに思いを致して、次のようなセンターの活動を行おうと考えている。

1）阪大生の欧州大学への留学やインターンシップの支援
2）欧州からの阪大留学の広報活動や留学相談
3）阪大教職員の欧州における国際活動の支援

4）学術交流協定大学との交流支援
5）阪大欧州同窓会の活動支援
6）欧州の学術動向の調査・分析

センターの人員はセンター長と現地スタッフの2名の小所帯ではあるが、大阪大学の学生や教職員の皆様には、気軽にグローニンゲンに足を運んでいただき、多様でかつおおらかな必要性をセンターに向けていただき、積極的な利用をお願いする次第である。

（初稿）

In this February, the University of Groningen proudly announced that they will open a branch campus in Yantai, China in 2017. According to the information on line, this campus is expected to become the great first step for RUG to become a global university from international university. Is this challenge realistic, or just an oriental fable?

教員からの改訂コメント
1）this は不要
2）プレスリリース文の言葉使いである proudly は不要
3）they will open を it would open に
4）information on line は university に
5）become the great first step for RUG to のようなプレスリリース文の言葉使いはやめて help RUG to become と表現
6）from international university は不要
7）oriental fable?は意味不明、記事では疑問を述べるのではなく答えを書くべき

（2稿）

In February, the University of Groningen announced it would open a branch campus in Yantai, China in 2017. Those words are stated by Mr. Gornant Deekens, the spokesman of RUG. However, the university may not really realize how large the difference between the Netherlands and China have, and it can be a too big challenge for them.

教員からの改訂コメント
1）だれが述べたかを書く必要なし
2）between the Netherlands and China have は between the Netherlands and China are に
3）too big challenge for ~~them~~ は for RUG or for China のどちらか

（3稿）

In February, the University of Groningen announced it would open a branch campus in Yantai, China in 2017. However, the University may not really realize how large the differences between the Netherlands and China are, and it can be a too big challenge for RUG.

図3　グローニンゲン大学に留学していた阪大生の英文レポート（抜粋）と担当教員の添削指導による改訂